慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『山谷詩集注』を読む : 本草とその周辺
Sub Title	Reading Shangu Shiji Zhu (山谷詩集注, an annotated edition of Shanggu's anthology of poems) : herbology and related topics
Author	村越, 貴代美(Murakoshi, Kiyomi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・ 文化・ コミュニケーション (Keio University Hiyoshi review. Language, culture and communication). No.51 (2019.) ,p.39- 69
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20191231-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『山谷詩集注』を読む
――本草とその周辺――

村越　貴代美

『山谷詩集注』二十巻は，宋の黄庭堅撰，任淵注。黄庭堅（1045 ～ 1105，字は魯直，号は山谷道人）の詩およそ七百首について，黄庭堅晩年の弟子である任淵（1090 ？～ 1164）が注をつけ，繫年したもの。

本誌で三回にわたって，その編纂の経過，テキストに関する調査と考察，黄庭堅の作品の制作年と制作地，任淵が注に利用した文献と引用した詩人（文章家を含む）の調査と考察を，おこなってきた。また山谷詩の用韻についての考察，山谷詩を解読する方法についての考察も，別途おこなった。黄庭堅と仏教（とくに禅宗）との深い関わりも見えてきた。これまでの論考は，以下のとおり。

①「黄庭堅の詩に学ぶ――姜夔」，『風絮』13 号，日本詞曲学会，2016 年，1 ～ 27 頁。

②「『山谷詩集注』を読むために」，慶應義塾大学日吉紀要『言語・文化・コミュニケーション』48 号，2016 年，63 ～ 89 頁。

③「『山谷詩集注』を読むために（2）」，慶應義塾大学日吉紀要『言語・文化・コミュニケーション』49 号，2017 年，103 ～ 131 頁。

④「黄庭堅の詩詞の用韻について」，『風絮』14 号，日本詞曲学会，2017 年，19 ～ 71 頁。

⑤「黄庭堅の詩路（詩的論理）について」，慶應義塾大学日吉紀要『中国研究』11 号，2018 年，1 ～ 41 頁。

⑥「『山谷詩集注』を読むために（3）」，慶應義塾大学日吉紀要『言語・文化・コミュニケーション』50 号，2018 年，81 ～ 109 頁。

⑦「黄庭堅と仏教」，『法住教と法住記』所収，2018 年，131 ～ 154 頁，文人画研究会。

『山谷詩集注』に関する基本的な調査・考察を終えて，今後はこれまで作ってきたデータをチェックしつつ，『山谷詩集注』の中からいくつか作品を選んで，読んでいこうと思う。

詩の読み方はいろいろあるだろうが，任淵の注によく引かれている文献に注目し，それが作品にどのような表現となって現れるのか，という視点に立ちたい。

拙論⑤で，荒井健氏が黄庭堅の詩を「考えぬかれた詩的論理のたていとに，博引傍証の引用から成る隠喩のよこいとをからませて織りあげられる絢爛豪華な蜀の錦にもたとえられよう

か」[1] と分析されたことを踏まえて，

荒井健氏は，黄庭堅の詩的論理をたていと，博引傍証の引用から成る隠喩をよこいとになぞらえたが，任淵の注を通して山谷詩を読んでいると，膨大な量の古典文献が経糸（たていと）として織機にはられており，緯糸（よこいと）をくくりつけた梭（ひ）が自在に飛び交って，精緻に布を織り上げていくイメージがあった。

と述べた。あの時点では『山谷詩集注』巻一の引用文献を調べて傾向が分かっただけであったが，その後さらに調べて，いま全二十巻で約 8000 項目のデータがある。経糸（たていと）にどのようなものがあるのか，すなわちどのような古典文献から発想や字句を得ていたのか，かなり分かってきたので，とりわけ太い経糸（たていと），何度も利用されている文献に注目し，そこから山谷詩を読んでみようというわけである。

本稿では，本草に関する文献と作品を取り上げる。黄庭堅は若い頃，家が貧しく父親も早くに亡くなったので，薬屋でもやろうかと考えていた[2]。『山谷詩集注』全二十巻の冒頭に置かれた作品，蘇軾に送って交流が始まるきっかけとなった「古詩二首上蘇子瞻」は，任淵注に「前篇梅以属東坡」「後詩松以属東坡，茯苓以属門下士之賢者，菟糸以自況」，前篇（第一首）は梅で蘇軾をなぞらえ，後篇（第二首）は松で蘇軾をなぞらえ，茯苓で門下の諸賢，菟糸（ネナシカズラ）で自らをなぞらえた，とあり，本草文献が注に引用される。また第二首の詩句には，「医和（いか）」という古代の名医も登場する。

黄庭堅の医薬への関心は，作品にどのように反映されたであろうか。

一，宋代までの本草学

中国では古代の炎帝神農が人々に医薬と農耕の術を教えたという伝説があり，前漢・司馬遷『史記』「扁鵲倉公列伝」に薬の服用による治療法も登場するが，「本草」の語は後漢・班固『漢書』に初めて見える。『漢書』「郊祀志」に，成帝の建始二年（紀元前 31），祭祀と祭壇の縮小・廃止が議論され，

候神方士使者副佐・本草待詔七十余人，皆帰家。

神々を迎える方士の使者とその副官，本草待詔の七十数人が，家に帰された。

とあり，唐の顔師古は注して，

本草待詔謂以方薬本草而待詔者。

本草待詔は，方薬本草で天子にお仕えする者をいう。

という。『漢書』「平帝紀」には，元始五年（紀元 5），

1） 荒井健注『黄庭堅』「解説」，中国詩人選集二集 7，1963 年，岩波書店，11 頁。

2） 吉川幸次朗「詩人と薬屋――黄庭堅について」，『吉川幸次郎全集』第 13 巻，筑摩書房，1969 年，所収，参照。

徴天下通知逸経・古記・天文・暦算・鍾律・小学・史篇・方術・本草以及五経・論語・孝経・爾雅教授者，在所為駕一封軺伝，遣詣京師。至者数千人。

天下に通知して，逸経・古記・天文・暦算・鍾律・小学・『史篇』・方術・本草および五経・『論語』・『孝経』・『爾雅』を教授する者を集め，所在地で一封軺伝（一尺五寸の木製の伝信を持って公家の馬車に乗ること）して，京師（都）へ呼び寄せた。数千人にのぼった。

とあり，また『漢書』「游侠伝」には，楼護という人が，

父世医也。護少随父為医長安，出入貴戚家。護誦医経・本草・方術数十万言，長者咸愛重之。

父が代々の医者だった。楼護は若いころから父に従って長安で医術をおさめ，顕貴な人々のところに出入りしていた。医経・本草・方術数十万言を朗誦することができ，重んじられた。

とある。『漢書』「芸文志」には「神農黄帝食禁七巻」が著録されているが，「本草」を書名としたものは見えない。

本草に関する先行研究[3]によれば，後漢末から三国時代にかけて本草書がいくつかあったが，現在まで伝わるのは『神農本草経（本草経)』（撰者未詳）の系統で，もと三百六十五種の薬物が上薬・中薬・下薬の三品に分類された。その後，薬数や条文に相違のある伝本が多く作られ，南朝梁の陶弘景（456 ～ 536）が整理し，『名医別録』から薬物を採用して約七百三十種に増やし，自注を加えて『神農本草経集注（本草集注)』三巻（500 年頃）とした。上巻は凡例と薬物論の序例，中巻と下巻は薬物の各論で，玉石・草木などの自然分類に上中下の三品分類を併用した。三巻本は中巻・下巻が長すぎて不便だったので，のちにそれぞれ三巻ずつに分けて，計七巻本に改められた。

『本草経』の上中下三品の分類は，上薬は「命を養う」もの，中薬は「性を養う」もの，下薬は「病を治す」もので，陶弘景もこの分類を襲った。上品は無毒で長期服用が可能な養命薬，中品は毒にもなり得る養性薬，下品は毒が強く長期服用が不可能な治病薬。中でも上薬はほとんどが「久しく服すれば身を軽くし，老いず，神仙となる」もので，「本草が，今日の薬学にそのまま置きかえられない性格のものであり，がんらい，方士たちの神仙への憧れの産物にほかならないことを示している」[4]という。陶弘景は道教の茅山派の開祖で，茅山の霊媒師楊羲に降りた真人の教えを整理した『真誥』は，道教上清派の経典である。

唐代になると中国南北が統一され，南海や西洋との交易が増大して薬物の数も増加したため，

3） 以下，本草文献の流れについては，岡西為人『本草概説』，創元社，1977 年，真柳誠「中国本草と日本の受容」，『日本版　中国本草図録』巻 9，中央公論社，1993 年，218～229 頁，を参照した。

4） 坂出祥伸『「気」と養生　道教の養生術と呪術』所収「薬物の服用と養生」，人文書院，1993 年，参照。引用は，154 頁。

後漢	2 世紀頃	『神農本草経』	
	3～4 世紀	『名医別録』	
梁	500 年頃	陶弘景『本草集注』	
唐	659	『新修本草』	
	739	陳蔵器『本草拾遺』	
五代後蜀	934～965	韓保升『重広英公本草』（蜀本・蜀本草）	
北宋	973	『開宝新詳定本草』	
	974	『開宝重定本草』	
	1057	校正医書局が発足。掌禹錫・林億・張洞・蘇頌が校訂に着手。	
	1061	掌禹錫『嘉祐補注神農本草』、蘇頌『図経本草』	
	1086～93 頃	唐慎微『証類本草』（掌氏と蘇氏の二書をあわせる）	
	1105	**黄庭堅卒す**	
	1108	『大観本草』	
	1111	**任淵『山谷詩集注』初稿**	
	1116	『政和本草』	
	1119		『本草衍義』
北宋滅亡 金・南宋	1127	金軍の侵攻により、北宋滅亡。宋室の南渡、南宋はじまる。	
		↓『政和本草』、版木が金へ。金で印刷流布。	↓『本草衍義』、南宋で『大観本草』とともに流布。
	1155		**任淵『山谷詩集注』刊行**
	1159		『紹興本草』
金滅亡 蒙古・南宋	1249	『政和本草』『本草衍義』をあわせて『重修政和経史証類備用本草』二十巻	

勅命により蘇敬らが陶弘景『本草集注』七巻本を増補して，『新修本草』（659 年，「唐本草」と呼ばれる）を完成させた。唐が滅んで五代になると，後蜀（934 ～ 965）では勅命により韓保升が『新修本草』とその「図経」に改訂を加えて『重広英公本草』を編纂し（「蜀本」「蜀本草」と呼ばれる），私撰の本草も多く編纂された。

北宋の時代になると，写本で伝わっていた医書を校訂して木版印刷で刊行するようになる[5)]。開宝六年（973）に太祖の詔によって『開宝新詳定本草（開宝本草）』が，翌年（974 年）には

5） 浦山きか『中国医書の文献学的研究』，第三章「北宋の医書校訂について」，汲古書院，2014 年，255～289 頁，参照。

これを改訂して『開宝重定本草』が刊行された。唐・陳蔵器『本草拾遺』（739 年）なども引用された。嘉祐二年（1057）には仁宗の命により校正医書局が発足し，掌禹錫・林億・張洞・蘇頌が校訂に着手し，嘉祐六年（1061）に掌禹錫『嘉祐補注神農本草（嘉祐本草）』と蘇頌『図経本草』が刊行された。

哲宗の元祐年間（1086 ～ 1093）の頃，成都の医師唐慎微が掌禹錫『嘉祐本草』と蘇頌『図経本草』を合わせ，さらに新薬五百種ほどを増し，多くの医書，本草書からの引用文を加えて『経史証類備急本草（証類本草）』を編纂した。

徽宗の大観二年（1108），艾晟『経史証類大観本草（大観本草）』が刊行され，政和六年（1116）に曹孝忠らの校正本『政和新修経史証類備用本草（政和本草）』が編纂された。『嘉祐本草』への補足をまとめた寇宗奭『本草衍義』（1119 年）も成立した。

欽宗の建炎元年（1127），金軍の侵攻により北宋は滅亡，宋室は南渡し，北方は金が支配し，南方は南宋の時代となった。金軍が奪った厖大な戦利品の中に，印刷し頒布を待つばかりだった『政和本草』と『聖済総録』の版木があり，両書は南宋では伝わらず，存在すらほとんど知られなかった。かわりに南宋では『大観本草』と『本草衍義』が幾度も復刻され，『大観本草』を校訂した王継先『紹興校定経史証類備急本草（紹興本草）』（1159）も刊行された。金では『政和本草』が印刷流布したが，金が蒙古に滅ぼされた直後の 1249 年（南宋の理宗淳祐九年）に『重修政和経史証類備用本草（晦明軒本政和本草）』が刊行された。晦明軒本『政和本草』は，『本草衍義』をバラして『政和本草』に挿入しており，現在でも影印復刻本が出ている。

二，山谷詩と任淵注の本草文献

『山谷詩集注』二十巻は，初稿は北宋の政和元年（1111）にできていたが，その後増補修正を加え，四十年ほど後の紹興二十五年（1155）に刊行された。従って任淵が利用できたのは，上記の本草文献のうち『大観本草』と『本草衍義』まで，黄庭堅が読めたのは唐慎微『証類本草』まで[6]である。

『山谷詩集注』で任淵が引用している本草関係の文献は，次の五種。

『本草経』【散逸】，後漢・佚名。

『本草経集注』【散逸】，梁・陶弘景撰。

『新修本草』（唐本草），唐・蘇敬等奉勅撰。

『本草拾遺』（陳蔵器本草），唐・陳蔵器撰。

6）ただし唐慎微の『証類本草』は未完成の稿本だったのではないかと考えられている。岡西為人『本草概説』，105 頁。

『図経本草』【散逸】，宋・蘇頌撰。

南宋の南宋の私撰書目，晁公武（1105～1180)『郡斎読書志』と陳振孫（1183～1261？)『直斎書録解題』では，『郡斎読書志』に『図経本草』が著録されるのみ[7]であるが，宋代以前の本草書が引用されている『嘉祐本草』『大観本草』等はどうかというと，『郡斎読書志』には『証類本草』が，『直斎書録解題』には『大観本草』『本草衍義』『紹興本草』が著録されている

任淵も宋代以前の本草書については，『嘉祐本草』『証類本草』『大観本草』『本草衍義』等に引用されるものを利用していた可能性がある。『山谷詩集注』巻四の「送顧子敦赴河東三首」其三「馬乳蒲萄不待求」の注に「按本草蒲萄注，蜀本図経云…」とあるが，これは掌禹錫『嘉祐本草』の按語に「臣禹錫等謹按蜀本図経云…」とあるのを引いている。「蜀本図経」は，韓保升『蜀重広英公本草』中の「図経」のこと。『嘉祐本草』より後の『証類本草』『大観本草』にも掌禹錫等の按語はそのまま引かれている。また『新修本草』を「唐本草」，『本草拾遺』を「陳蔵器本草」と呼ぶのも，『嘉祐本草』以下の本草文献にならっている。

任淵注に引用される本草文献は，それぞれ次の作品に見える。詩題の前の数字は作品番号で，例えば0101は巻一第一首の意。任淵の注は，詩題や詩句に適宜割ってはいる形で加えられている。作品ごとに○数字で任淵注に通し番号をつけた。（薬名は『大観本草』に従う）

1，『本草経』【散逸】，後漢・佚名。

0101「古詩二首上蘇子瞻」⑫⑬⑭⑮（⑫菟糸子，⑬茯苓，⑭菟糸子，⑮菟糸子）

0113「演雅」③⑩（③礜石，⑩蝼蛄）

0206「以小団竜及半挺贈無咎幷詩用前韻為戯」⑩（⑩水蘇・胡麻）

0307「顕聖寺庭枸杞」①③⑤（①枸杞，③枸杞，⑤枸杞）

0403「和邢惇夫秋懐十首」②（②人参）

0408「送顧子敦赴河東三首」②⑤（②人参・紫参，⑤葡萄）

0505「戯詠蠟梅二首」③（③麝香）

0508「賈天錫恵宝薫乞詩予以兵衛森画戟燕寝凝清香十字作詩報之」④（④石蜜）

0721「次韻王定国揚州見寄」②（②鶏頭実）

0928「題伯時天育驃騎図二首」③（③蒺藜子）

1706「亀殼軒」①（①亀甲）

2019「乞鍾乳於曽公袞」②③（②石鍾乳，③刀圭）

2，『本草経集注』【散逸】，梁・陶弘景撰。

0101「古詩二首上蘇子瞻」⑫⑬（⑫菟糸子，⑬茯苓）

7）拙論「『山谷詩集注』を読むために（3)」，参照。

0113「演雅」③⑩（③礜石，⑩螻蛄）
0307「顕聖寺庭枸杞」③（③枸杞）
0505「戯詠蠟梅二首」③（③麝香）
0508「賈天錫恵宝薫乞詩予以兵衛森画戟燕寝凝清香十字作詩報之」④（④石蜜・木瓜実）
0615「次韻秦覯過陳無己書院観鄙句之作」④（④薺）
1401「走筆謝王朴居士拄杖」①（①木瓜実）
2019「乞鍾乳於曽公袞」②（②石鍾乳）

3,『新修本草』（唐本草），唐・蘇敬等奉勅撰。
0110「贛上食蓮有感」①（①丹砂）
0301「有恵江南帳中香者戯答六言二首」②③（②沈香，③甲香）
0508「賈天錫恵宝薫乞詩予以兵衛森画戟燕寝凝清香十字作詩報之」④（④沈香）

4,『本草拾遺』（陳蔵器本草），唐・陳蔵器撰。
0113「演雅」③（③鸛骨）
1507「謝王子予送橄欖」②（②庵摩勒）

5,『図経本草』【散逸】，宋・蘇頌撰。
0110「贛上食蓮有感」③（③菰根）
0319「戯詠猩猩毛筆」②（②桄榔）
0408「送顧子敦赴河東三首」⑤（⑤葡萄）
0508「賈天錫恵宝薫乞詩予以兵衛森画戟燕寝凝清香十字作詩報之」④（④石蜜・木瓜実）
1105「戯答晁深道乞消梅二首」③（③梅実）
1508「以椰子小冠送子予」①（①椰子皮）
1904「次韻徳孺恵貺秋字之句」②（②丹砂）

薬物の項目で見ていくと，以下のとおり（『大観本草』の薬名，巻数・分類・配列に従う）。

丹砂（『大観本草』巻三「玉石部上品」）
0110「贛上食蓮有感」①『新修本草』
1904「次韻徳孺恵貺秋字之句」②『図経本草』
石鍾乳（『大観本草』巻三「玉石部上品」）
2019「乞鍾乳於曽公袞」②『本草経』『本草経集注』
礜石（『大観本草』巻五「玉石部下品」）

0113「演雅」③『本草経』『本草経集注』

人参（『大観本草』巻六「草部上品之上」）

0403「和邢惇夫秋懐十首」②『本草経』

0408「送顧子敦赴河東三首」②『本草経』

菟糸子（『大観本草』巻六「草部上品之上」）

0101「古詩二首上蘇子瞻」⑫⑭⑮『本草経』『本草経集注』

蒺藜子（『大観本草』巻七「草部上品之下」）

0928「題伯時天育驃騎図二首」③『本草経』

紫参（『大観本草』巻八「草部中品之上」）

0408「送顧子敦赴河東三首」②『本草経』

菰根（『大観本草』巻十一「草部下品之下」）

0110「贛上食蓮有感」③『図経本草』

枸杞（『大観本草』巻十二「木部上品」）

0307「顕聖寺庭枸杞」①『本草経』，③『本草経』『本草経集注』，⑤『本草経』

茯苓（『大観本草』巻十二「木部上品」）

0101「古詩二首上蘇子瞻」⑬『本草経』『本草経集注』

沈香（『大観本草』巻十二「木部上品」）

0301「有恵江南帳中香者戯答六言二首」②『新修本草』

0508「賈天錫恵宝薫乞詩予以兵衛森画戟燕寝凝清香十字作詩報之」④『新修本草』

庵摩勒（『大観本草』巻十三「木部中品」）

1507「謝王子予送橄欖」②『本草拾遺』

桄榔（『大観本草』巻十四「木部下品」）

0319「戯詠猩猩毛筆」②『図経本草』

椰子皮（『大観本草』巻十四「木部下品」）

1508「以椰子小冠送子予」①『図経本草』

麝香（『大観本草』巻十六「獣部上品」）

0505「戯詠蠟梅二首」③『本草経』『本草経集注』

鸛骨（『大観本草』巻十九「禽部三品・下品」）

0113「演雅」③『本草拾遺』

石蜜（『大観本草』巻二十「虫魚部上品」）

0508「賈天錫恵宝薫乞詩予以兵衛森画戟燕寝凝清香十字作詩報之」④『本草経』『本草経集注』

亀甲（『大観本草』巻二十「虫魚部上品」）

1706「亀殼軒」①『本草経』

蝼蛄（『大観本草』巻二十二「虫魚部下品」）

0113「演雅」⑩『本草経』『本草経集注』

甲香（『大観本草』巻二十二「虫魚部下品」）

0301「有恵江南帳中香者戯答六言二首」③『新修本草』

蒲萄（『大観本草』巻二十三「果部三品・上品」）

0408「送顧子敦赴河東三首」⑤『本草経』『図経本草』

鶏頭実（『大観本草』巻二十三「果部三品・上品」）

0721「次韻王定国揚州見寄」②『本草経』

梅実（『大観本草』巻二十三「果部三品・中品」）

1105「戯答晁深道乞消梅二首」③『図経本草』

木瓜実（『大観本草』巻二十三「果部三品・中品」）

0508「賈天錫恵宝薫乞詩予以兵衛森画戟燕寝凝清香十字作詩報之」④『本草経集注』『図経本草』

1401「走筆謝王朴居士拄杖」①『本草経集注』

胡麻（『大観本草』巻二十四「米穀部上品」）

0206「以小団竜及半挺贈無咎幷詩用前韻為戯」⑩『本草経』

薺（『大観本草』巻二十七「菜部上品」）

0615「次韻秦覯過陳無己書院観鄙句之作」④『本草経集注』

水蘇（『大観本草』巻二十八「菜部中品」）

0206「以小団竜及半挺贈無咎幷詩用前韻為戯」⑩『本草経』

ほかに「刀圭」が2019「乞鍾乳於曾公袞」③に引かれるが，「刀圭」は「さじ」のこと。

山谷詩に出てくるとして任淵が注した薬物のうち，梁・陶弘景『本草経集注』に収録されていたのは，『神農本草経』にもとあった三百六十五種のうち丹砂・石鍾乳・礬石・人参・菟糸子・蒺藜子・紫参・枸杞・茯苓・麝香・石蜜・亀甲・蝼蛄・蒲萄・鶏頭実・梅実・水蘇・胡麻の十八種と，陶弘景が『名医別録』から採用した菰根・沈香・鸛骨・木瓜実・薺の五種。唐代の『新修本草』になって採用された薬物が，庵摩勒・甲香の二種，宋代仁宗期の『嘉祐本草』『図経本草』になって採用された薬物が，桄榔・椰子皮の二種ある。

『山谷詩集注』には，黄堅庭が神宗の元豊元年（1078），三十四歳のときに蘇軾に送った「古詩二首上蘇子瞻」から，徽宗の崇寧四年（1105），六十一歳で病没するまでの詩がおさめられている。

黄庭堅は地方官時代が長く続き，神宗の元豊八年（1085），四十一歳の秋から京師汴京（今の河南省開封市）での生活が始まる。元祐五年（1090），四十六歳，早く父を亡くした黄庭堅の後ろ盾となってくれていた舅父李常，岳父孫覚が相継いで亡くなり，翌年には母の李氏も没

した。この頃，政治状況も黄庭堅が属していた党派に不利に傾き，詩作が急激に減る。『山谷詩集注』でいえば巻十一までで，本草文献が出てくる作品も，この頃までのものが多い。

哲宗の紹聖三年（1096），五十二歳，師と仰いだ蘇軾は海南島に流され，自身は黔州（今の四川省彭水県）に流された。この頃からまた詩作が増え，哲宗が没し徽宗が即位して一時赦されたかに見えたが，黄庭堅の属していた党派への迫害は続き，崇寧二年（1103），五十九歳で著書は発禁，宜州（今の広西チワン族自治区宜山県）に流罪の命を受け，崇寧四年（1105），六十一歳，その地で病没した。詩作は最期まで衰えず，本草文献にもとづく作品もある。

地理的なことで言えば，黄庭堅は南方の分寧（今の江西省修水県）の出身で，地方官時代は肉親と離れて北方で単身，勤務をしていた時期もある。北宋の京師汴京は北方，黄河の中流域。晩年に左遷された地域は，都からも故郷からも遠い，長江上流域や中国南部，現在も少数民族の暮らす地域である。

地方官時代

0101「古詩二首上蘇子瞻」⑫⑬⑭⑮（⑫菟糸子，⑬茯苓，⑭菟糸子，⑮菟糸子）

0110「贛上食蓮有感」①③（①丹砂③菰根）

0113「演雅」③⑩（③礜石・鸛骨，⑩螻蛄）

京師汴京時代

0206「以小団竜及半挺贈無咎幷詩用前韻為戯」⑩（⑩水蘇・胡麻）

0301「有恵江南帳中香者戯答六言二首」②③（②沈香，③甲香）

0307「顕聖寺庭枸杞」①③⑤（①枸杞，③枸杞，⑤枸杞）

0319「戯詠猩猩毛筆」②（②梡榔）

0403「和邢惇夫秋懐十首」②（②人参）

0408「送顧子敦赴河東三首」②⑤（②人参・紫参，⑤葡萄）

0505「戯詠蠟梅二首」③（③麝香）

0508「賈天錫恵宝薫乞詩予以兵衛森画戟燕寝凝清香十字作詩報之」④（④石蜜・沈香・木瓜実）

0615「次韻秦覯過陳無己書院観鄙句之作」④（④薺）

0721「次韻王定国揚州見寄」②（②鶏頭実）

0928「題伯時天育驃騎図二首」③（③蒺藜子）

1105「戯答晁深道乞消梅二首」③（③梅実）

晩年左遷時代

1401「走筆謝王朴居士拄杖」①（①木瓜実）

1507「謝王子予送橄欖」②（②庵摩勒）

1508「以椰子小冠送子予」①（①椰子皮）

1706「亀殼軒」①（①亀甲）

1904「次韻徳孺恵貺秋字之句」②（②丹砂）

2019「乞鍾乳於曾公袞」②③（②石鍾乳，③刀圭）

三，枸杞の詩

薬物そのものを詠んでいる詩，0307「顕聖寺庭枸杞（顕聖寺の庭の枸杞）」を，まず見てみよう。哲宗の元祐元年（1086），黄庭堅四十二歳，京師汴京で秘書省校書郎だった頃の作。この年の初め，京師ではじめて蘇軾と会う。

枸杞は，ナス科クコ属の落葉低木，成熟した赤い果実を乾燥させたものが生薬の枸杞子で，『詩経』小雅「四牡」に「集於苞杞（苞杞に集まる）」，陸機疏（陸璣『毛詩草木鳥獣虫魚疏』）に「一名苦杞，一名地骨。春生，作羹茹微苦。其茎似莓。子秋熟，正赤。茎・葉及子服之，軽身益気（一名苦杞，一名地骨。春に生え，羹にする，やや苦い。茎は莓（バラ科でトゲがある）に似ている。実は秋に熟し，真っ赤である。茎と葉，実を服用すると，身を軽くし気を益す）」とあり，古くから不老長寿の妙薬として利用されてきた。

『大観本草』巻十二「木部上品」の「枸杞」には，『本草経』および陶弘景の注として，

味苦，寒。根大寒，子微寒，無毒。主五内邪気，熱中消渇，周痺，風湿，下胸脅気，客熱頭痛，補内傷大労嘘吸，堅筋骨，強陰，利大小腸。久服堅筋骨，軽身不老，耐寒暑。一名杞根，一名地骨，一名枸忌，一名地輔，一名羊乳，一名却暑，一名仙人杖，一名西王母杖。生常山平沢及諸丘陵阪岸。冬採根，春夏採葉，秋採茎実，陰乾。

味は苦，寒。根は大寒，実は微寒，無毒。主治は，五臓の邪気，熱中（肝炎）と消渇（糖尿病），周痺（多発性関節リウマチ），風湿（リウマチ），胸脅（肝臓脾臓）の気。客熱（小児の発熱）・頭痛をおさめ，内傷・大労・嘘吸を補い，筋骨を堅くする。陰を強くし，大小腸を利す。久しく服用すると，筋骨を堅くし，軽身不老，寒暑に耐える。一名杞根，一名地骨，一名枸忌，一名地輔，一名羊乳，一名却暑，一名仙人杖，一名西王母杖。常山（恒山）の平沢の地および丘陵や阪岸に生息する。冬は根を採り，春夏は葉を採り，秋は茎実を採り，陰干しする。

陶隠居云，今出堂邑，而石頭烽火楼下最多。其葉可作羹，味小苦。俗諺云，去家千里，勿食籮摩・枸杞。此言其補益精気，強盛陰道也。籮摩一名苦丸，葉濃大，作藤生，摘之有白乳汁，人家多種之。可生啖，亦蒸煮食也。枸杞根実，為服食家用，其説甚美，仙人之杖，遠有旨乎。

陶隠居云う，いま堂邑（今の江蘇省）で採れるが，石頭山（今の南京市にある）烽火楼のふもとが最も多い。その葉は羹にできるが，味はやや苦い。俗諺に，「家を去ること千里，籮摩・枸杞を食すなかれ」という。これは精気を補益し，陰道を強盛することを

言うのである。籮摩は一名苦丸，葉は濃く大きく，蔓になり，摘むと白い乳のような汁が出る。人家で多く植えられる。生で食べたり，また蒸したり煮たりして食べる。枸杞の根と実は，丹薬を服用する人たちに用いられる。彼らによれば，とても「美」であるが，仙人の杖というのは，主旨が遠い（真実から離れている）。

とある。枸杞には「仙人杖」など多くの異称があり，古くから精気を益して寿命を延ばすと伝えられてきた。それが寺に植えられているのはいったい何故だろう，と黄庭堅は諧謔に富んだ詩を作った。

0307 顕聖寺庭枸杞

顕聖寺の庭の枸杞

1 仙苗寿日月	仙苗　日月　寿（なが）し
2 仏界承雨露	仏界に雨露を承く
3 誰為万年計	誰か万年の計を為し
4 乞此一抔土①	此の一抔の土を乞（あた）えたる
5 扶疏上翠蓋	扶疏として翠蓋を上げ
6 磊落綴丹乳②	磊落として丹乳を綴らん
7 去家尚不食	家を去るに尚お食わず
8 出家何用許③	家を出ては何ぞ用って許さん
9 政恐落人間	政に恐る　人間に落ち
10 采剥四時苦④	采剥されて四時に苦しまんことを
11 養成九節杖	養いて九節の杖と成し
12 持献西王母⑤	持して西王母に献ぜよ

【任淵注】

①管子[8] 曰，百年之計，樹之以木。漢書張釈之伝[9] 曰，仮令愚民取長陵一抔土，何以加其法乎。注云，抔音歩侯反，謂手掬之也。乞字去声読。○本草[10]，枸杞一名地仙。

8）『管子』巻一「権修第三」に「一年之計，莫如樹穀。十年之計，莫如樹木。終身之計，莫如樹人」とある。

9）『前漢書』巻五○「張釋之伝」。

10）『本草経』（『大観本草』巻十二「木部上品」，「枸杞」条）。

②漢書劉向伝[11] 曰，梓樹生枝葉，扶疏上出屋。蜀志先主伝[12] 曰，桑樹童童如小車蓋。陸璣詩疏[13] 云，枸杞子秋熟正赤。文選宋玉風賦[14]，枳句来巣。李善注引司馬彪曰，桐子似乳，著其葉而生。此借用。

③本草枸杞条，陶隠居注[15] 曰，俗諺云，去家千里，勿食蘿摩枸杞。言其強盛陰道也。

④言在僧坊，則不用食此，故免采剥之害。東坡先生後杞菊賦[16] 曰，吾方以杞為糧，以菊為糗，春食苗，夏食葉，秋食花実，而冬食根，庶幾乎西河南陽之寿。

⑤本草[17]，枸杞一名仙人杖，一名西王母杖。老杜詩[18]，安得仙人九節杖，拄到玉女洗頭盆。按真誥[19]，楊羲夢蓬萊仙翁拄赤九節杖，而視白竜。

【通釈】

顕聖寺の庭の枸杞

仙人が食べる枸杞の苗は，寿命を長くする。ここでは仏の慈悲の雨露を，注がれている。誰が万年も生きようとして，ひとすくいの土を盛った（植えた）のだろう。枝葉は茂って翠の傘をかぶったよう，実はぶらぶらと赤い乳を垂れている。家を去る（旅する）にも精力がつきすぎるからと食べないのに，出家の身でどうして食うことが許されよう（許されるはずがない）。（なのに寺に植えられたのは）きっと世間に生まれ落ちたら，むしりとられて春夏秋冬，四季苦しむことを恐れたからだろう。（この寺で）九節の杖となるまで育てて，西王母に杖として献上されるがよい。

①『管子』に「百年の計は，之を樹うるに木を以てす」とある。『漢書』「張釈之伝」に「仮令（たとい）愚民長陵一抔の土を取るとも，何を以てか其の法を加えんや」とあり，注に「抔，音は歩侯の反，手もて之を掬うを謂うなり」という。乞の字は去声の読み。○『本草』に「枸杞，一名地仙」とある。

②『漢書』「劉向伝」に「梓樹 枝葉を生じ，扶疏として上りて屋を出づ」とある。『蜀志』「先主伝」に「桑樹は童童として小さき車蓋の如し」とある。陸璣の『詩』の疏に「枸杞の子は秋に熟して正に赤し」とある。『文選』宋玉「風賦」に「枳句は巣を来たす（カラ

11）『漢書』巻三六「劉向伝」。

12）『三国志・蜀志』巻二「先主伝」。

13）『詩』小雅「四牡」，「集于苞杞」句の陸璣疏。

14）『文選註』巻一三，宋玉「風賦」。

15）『本草経』陶隠居注（『大観本草』巻十二「木部上品」，「枸杞」条）。

16）蘇軾「後杞菊賦并敘」，『東坡全集』巻三三。

17）『本草経』（『大観本草』巻十二「木部上品」，「枸杞」条）。

18）杜甫「望岳」，『九家集注杜詩』巻一九。

19）『真誥』巻一七「覚題云楊君」。

タチの曲がった枝振りは巣を引き寄せる)」とあり，李善注に司馬彪を引いて「桐子は乳に似て，其の葉に著いて生ず」とある。此は借用した。

③『本草』の「枸杞」の条に陶隠居が注して，「俗諺に『家を去ること千里，蘿摩・枸杞を食す勿れ』という。其れ陰道を強盛にするを言うなり」とある。

④言うこころは，僧坊に在れば，則ち此を食すを用いず，故に采剥の害を免る。東坡先生の「後杞菊賦」に「吾れ方に杞を以て糧と為し，菊を以て糗と為す，春は苗を食い，夏は葉を食い，秋は花実を食い，而して冬は根を食い，西河南陽の寿を庶幾(こいねが)う」とある。

⑤『本草』に「枸杞は一名仙人杖，一名西王母杖」とある。老杜の詩に「安んぞ仙人九節の杖を得て，拄げて玉女の洗頭盆に到らん」とある。按ずるに，『真誥』に「楊羲，蓬萊の仙翁の赤九節杖を拄(ささ)えて，白竜を視るを夢む」とある。

枸杞は「仙人杖」とも呼ばれることから，不老長寿の仙人が食するのであろう。ところがいま寺の庭に落ちて，苗には仏の慈悲の雨露が注がれている。やがて育って葉が茂り，赤い実をつける。寺の外であれば，蘇軾が「後杞菊賦」でうたったように，春には苗を食われ，夏には葉を食われ，秋には実を食われ，冬には根を食われ，一年中むしりとられて，大きく育つすべはない。枸杞は，一〜二メートルほどの高さまで育つ。「去家（旅をする）」には精力がつきすぎるから食べてはいけないとされる枸杞，まして「出家」者ばかりの寺ならば安全に育つだろう。無事に大きく育ったならば，西王母（崑崙山に住み，不老不死の薬をもつ神仙）の杖として，献上されたらよい。

「九節の杖」は，仙人が持つという杖。「日月」と「雨露」は天空の対，「万年」と「一抔」，「四時」と「九節」は数字の対，「翠蓋」と「丹乳」は色彩の対。これらを織り込みながら，苗から葉，実，杖にもできる高さの幹へと，生長を時系列で追いながら，仙界と仏界，そして世間（人間界）で重宝されている枸杞が詠われる。枸杞に，女性のイメージが付与されている。西王母が女仙，女神だからであろうか。寺ならば安全に生長して，西王母の杖としてまた仙界に戻ることができよう。

陶弘景の注に見える俗謡は，蘿摩と枸杞についての禁忌で，「摘むと白い乳汁を出す」のは蘿摩である。蘿摩はガガイモ，生の葉や茎から出る白い汁は，塗ると蛇や虫さされの解毒になる。若い芽は，茹でたり炒めたりして食用される。乾燥した実や葉は，強精剤として用いられる。蘇軾の「後杞菊賦」も，「秋は花実を食い」の「花」は，菊の花であろう。黄庭堅の「換骨奪胎」にしろ任淵の注にしろ，原典とやや異なる使い方になっており，薬物としての枸杞の効用というよりは，枸杞にまつわる伝説や枸杞に付与された詩的イメージに関心があるようだ。

四，桄榔・椰子皮の詩

桄榔・椰子皮は，宋代になってから採用された薬物である。ヤシ科で，熱帯地方を中心に亜熱帯から温帯にかけて広く分布する。

『大観本草』巻十四「木部下品」の「桄榔」には，

味苦，平，無毒。主宿血。其木似櫚堅硬。斫其内有面，大者至数皮堪作綆。生嶺南山谷。

味は苦，平，無毒。主治は宿血。その木は櫚に似て堅い。斫って（皮をはぐと）内側に澱粉がある。大きくなると数皮あり，綆を作るのに耐える。嶺南地方の山谷に生える。

とある。

桄榔はクロツグ，常緑性低木で，葉が長さ三メートルにも達し，羽状に広がって特徴的である。新芽と若葉は食用になり，葉は乾燥させてバラして紐や繊維として利用する。シュロと同じく，葉の黒い繊維はとても強く耐水性があり，船用の綱にも用いられる。

中国では檳榔（ビンロウ）のほうがヤシ科の植物としては早くから知られ，熟した種を乾燥させた檳榔子が虫下しなどに使われた。生の種は噛みタバコのような嗜好品として，現代でも使われている。

『大観本草』巻十三「木部中品」の「檳榔」には，

味辛，温，無毒。主消穀逐水，除痰癖，殺三虫・伏尸，療寸白。生南海。

味は辛，温，無毒。主治は消穀（消化をよくし）逐水（浮腫をとり），痰癖を除き，三虫・伏尸（人間の体内にいると考えられていた虫。道教に由来する）を殺し，寸白（サナダムシ）を退治する。南海に生える。

とある。『本草経』にすでにあった薬物で，『大観本草』は陶弘景の注からの引用。

椰子皮は，椰子の皮。止血作用があるという。ヤシ科の植物にはさまざまな種類があり，ココヤシの種は果実の中の液体を飲料とし，アブラヤシの実からはパーム油を採取したり，用途は広い。

『大観本草』巻十四「木部下品」の「椰子皮」には，

味苦，平，無毒。止血，療鼻衄，吐逆霍乱，煮汁服之。殼中肉，益気去風。漿。服之主消渇，塗頭益髪令黒。生安南。樹如棕櫚，子殼可為器。『交州記』曰，「椰子中有漿，飲之得酔。

味は苦，平，無毒。止血，鼻衄を治す。吐逆（胃からの逆流）・霍乱には，煮汁を服用する。殼の中には果肉があり，気を益し風を除く。漿（ミルク）は，服用すると消渇（多飲・多食・多尿のために痩せること）を治し，頭に塗ると髪を黒くする。安南（ベトナム北部）に生える。樹は棕櫚に似て，実の殼は器にできる。『交州記』に「椰子の中には漿があり，これを飲むと酔える」とある。

と記されている。

梡榔（檳榔）・榔子皮，それぞれに薬効があり，薬以外にも生活のさまざまな面で使われてきた。だが黄庭堅が関心を持ったのは，その生息地だった。

0319 戯詠猩猩毛筆①

戯に猩猩毛の筆を詠ず

1 梡榔葉暗賓郎紅	梡榔　葉暗くして　賓郎紅し
2 朋友相呼堕酒中②	朋友　相い呼び　酒中に堕つ
3 政以多知巧言語	政に多知にして言語を巧みにするを以て
4 失身来作管城公③	身を失して来りて管城公と作る
又	
1 明窓脱帽見蒙茸	明窓に帽を脱ぎ蒙茸を見る
2 酔着青鞋在眼中④	酔いて青鞋に着くるは眼中に在り
3 束縛帰来儻無辱	束縛せられて帰り来たれども　儻しくは辱とする無し
4 逢時猶作墨頭公⑤	時に逢わば猶お墨頭公と作らん

【任淵注】

①山谷有此詩跋[20] 云，銭穆父奉使高麗，得猩猩毛筆，甚珍之。恵予，要作詩。蘇子瞻愛其柔健可人意，毎過予書案，下筆不能休。此時二公俱直紫微閣，故予作二詩，前篇奉穆父，後篇奉子瞻。

②花間集欧陽炯南郷子詞[21] 曰，路入南中，梡榔葉暗蓼花紅。本草[22]，梡榔生嶺南山谷，賓郎生南海。堕酒中見上注[23]。

③老杜鸚鵡詩[24]，紅觜謾多知。退之詩[25]，惜哉此子巧言語。又毛穎伝[26] 曰，封諸管城，号管城子。易[27] 曰，臣不密，則失身。按劉夢得和楽天鸚鵡詩[28] 曰，誰遣聡明好顔色，争須安置入深籠。与此詩意同，而山谷語尤工。

20） 黄庭堅跋。

21） 歐陽炯「南郷子詞」，『花間集』巻六。

22） 『図経本草』「梡榔」（『大観本草』巻十四「木部下品」，「梡榔」条）。

23） 0318「和答銭穆父詠猩猩毛筆」の「愛酒酔魂在」句の注。

24） 杜甫「鸚鵡」，『九家集注杜詩』巻三〇。

25） 韓愈「感春四首」其二，『五百家注昌黎文集』巻三。

26） 韓愈「毛穎伝」，『五百家注昌黎文集』巻三六。

27） 『周易』「繫辞上」，『周易註』巻七。

28） 劉禹錫「和楽天鸚鵡」，『劉賓客文集』外集巻一。

④謂去其管弢，睹蒙茸之状，如見其飲酒著屐時。老杜詩[29]，脱帽露頂王公前。此借用。如退之毛穎伝[30]所謂免冠謝也。詩[31]曰，狐裘蒙茸。著鞋見上注[32]。老杜詩[33]，青鞋布襪従此始。選詩[34]，薛荔若在眼。老杜詩[35]，漢武旌旗在眼中。
⑤意謂東坡起自謫籍也。鮑叔牙[36]曰，使管仲無忘束縛於魯時。毛穎伝[37]曰，聚其族而加束縛焉。晋書[38]，諸葛恢名亜王導，庾亮。謂曰，明府当作黒頭三公。又王珣伝[39]，桓温曰，王掾当作黒頭公。按北史古弼伝[40]，弼頭尖，帝常名之曰筆頭，時人呼為筆公。故山谷於筆詩参用此事。

【通釈】

戯れに猩猩の毛の筆を詠んだ

梍榔は葉を暗く茂らせ，檳榔は紅い実をつける。そんなところで仲間と呼び合いながら，人がしかけた酒を飲んで捕えられる。猩猩は物知りで言語を巧みにあやつるので，死んだあとは「管城公」になった。

又

明るい窓辺で帽子を脱ぐと，髪はぐしゃぐしゃ。酔って草の履き物をはいた様子が目に浮かぶ。しばられて帰ってきたが，ひょっとすると恥ではないかも知れない。時に恵まれれば「墨頭公」となるだろう。

①山谷に此の詩の跋があり，「銭穆父（銭勰）[41]が高麗に使いしたとき，猩猩の毛の筆を得て，とても大事にしていた。私に恵んで，詩を作らせた。蘇子瞻（蘇軾）はその毛が柔らかくしなやかで思い通りに書けることを好み，私の机のそばを通りがかるたびに，筆を下ろして休むことがなかった。この当時，二公（銭勰と蘇軾）はともに（中書省）紫微閣で

29） 杜甫「飲中八仙歌」，『九家集注杜詩』巻二。
30） 韓愈「毛穎伝」，『五百家注昌黎文集』巻三六。
31） 『詩』邶風「旄丘」，『毛氏注疏』巻三。
32） 0318「和答銭穆父詠猩猩毛筆」の「愛酒酔魂在」句の注。
33） 杜甫「奉先劉少府新画山水障歌」，『九家集注杜詩』巻四。
34） 謝霊運「従斤竹澗越嶺渓行一首」，『文選註』巻二二。
35） 杜甫「秋興八首」其七，『九家集注杜詩』巻三〇。
36） 『新唐書』巻九七「魏徵伝」に見える。
37） 韓愈「毛穎伝」，『五百家注昌黎文集』巻三六。
38） 『晋書』巻七七「諸葛恢伝」。
39） 『晋書』巻六五「王珣伝」。
40） 『北史』巻二五「古弼伝」。
41） 元豊七年（1084）に高麗に使いし，「猩猩毛筆」を得て黄庭堅に詩を添えて贈った。

仕事をしていたので，私は二詩を作って，前篇[42]を穆父に奉じ，後篇[43]を子瞻に奉じた」という。

②『花間集』の欧陽炯「南郷子」詞に，「路は南中に入り，栳榔葉暗く蓼花紅し」とある。『本草』に，「栳榔は嶺南の山谷に生ず」「賓郎は南海に生ず」とある。「酒中に堕つ」は上注[44]を見よ。

③老杜の「鸚鵡」詩に「紅觜謾りに多知」とある。退之の詩に「惜しい哉，此の子言語を巧みにす」とある。また「毛穎伝」に「諸を管城に封じ，管城子と号す」とある。『易』に「臣密ならざれば，則ち身を失う」とある。按ずるに劉夢得の「楽天の鸚鵡に和す」詩に「誰か聡明顔色を好むを遣り，争いて須らく安置して深籠に入らしむ」とある。この詩と同じ趣旨であるが，山谷の語はより巧みである。

④筆の覆いをとって，ぐしゃぐしゃした様子を見ると，猩猩が酒を飲んで履き物をはいたときのように見える。老杜の詩に「帽を脱ぎ頂を王公の前に露わす」とある。ここは借用した。退之の「毛穎伝」に見える「冠を免じて謝す」のようなものである。『詩』に「狐裘蒙茸たり」とある。「鞋を著く」は上注に見える。老杜の詩に「青鞋布襪　此より始めん」とある。『選』詩に「薛荔　眼に在るが若し」とある。老杜の詩に「漢武の旌旗　眼中に在り」とある。

⑤意は，東坡が謫籍から戻ったことをいう。鮑叔牙は「管仲には魯に束縛された時のことを忘れさせないでください」と言った。「毛穎伝」に「その族を聚めて束縛を加えん」とある。『晋書』に「諸葛恢，名は王導，庾亮に次ぐ。明府当に黒頭三公と作るべし」とある。また「王珣伝」に「桓温曰く，王掾当に黒頭公と作るべし」とある。按ずるに『北史』「古弼伝」に「弼は頭が尖っていたので，帝はいつも筆頭と呼んでいたことから，当時の人々は筆公と呼んだ」とある。そこで山谷は筆の詩にこのことを用いた。

高麗にいった友人から，猩猩の毛をつかった珍しい筆をもらった。猩猩といえば，酒に酔うとまるで人間のように履き物をはきたがる面白い習性があるという。唐の韓愈は毛筆をパロディに「毛穎伝」を作り，「管城公」と呼んだ。鸚鵡にしても猩猩にしても，言葉を巧みにあやつるがために捕らえられるとは，皮肉なものである。これを承けて，二首めでは毛筆となった姿を，帽子（筆の覆い）をかぶっている時は分からないけれども，脱ぐとぼさぼさの頭で，酔

42）0318「和答銭穆父詠猩猩毛筆」のこと。

43）この詩のこと。

44）『唐文粋』巻七七「裴炎猩猩説」を引く。大意は，阮研という人が封渓に使いした際に村人から聞いた話で，猩猩は山や谷に数百の群れでいるが，酒を道ばたに置き，草で履き物を作ってむすびつけておくと，はじめは履き物を見て罠だと気づき，仕掛けた者の祖先の名を罵って立ち去るが，結局はまたやってきて酒を飲み，酔っぱらうと履き物をはいて村人に捕まってしまう，という。

って履き物をはき捕らえられた野生当時の様子が目に浮かぶ。それに墨を含ませて文字を書いているわけだが，いまは「墨頭公」となられた，と戯れに詠んだのである。

0319「戯詠猩猩毛筆」は，哲宗の元祐元年（1086）七月，四十二歳の作。秘書省校書郎のとき。一首めに「栳榔葉暗賓郎紅」とあるが，檳榔（ビンロウ）の種そのものは赤いわけではなく，噛んでいると種子に含まれる成分と唾液が反応して，真っ赤な唾液となる。この点を含めて，0319「戯詠猩猩毛筆」に登場する栳榔と檳榔は，薬物としてよりは，猩猩が遠い南国の動物であるということを点景する役割しか持たされていない。

これに対して 1508「以椰子小冠送子予」に登場する椰子は，生薬としては椰子皮におもな薬効があるが，黄庭堅の関心と感慨は別のところにあった。

1508 以椰子小冠送子予

椰子の小冠を以て子予に送る

1 漿成乳酒醺人酔　　漿　乳酒を成して人を醺じて酔わしむ
2 肉截鵝肪上客盤　　肉は鵝肪を截って客盤に上す
3 有核如匏可彫琢　　核有り匏の如くして彫琢すべし
4 道装宜作玉人冠①　　道装　宜しく玉人の冠と作すべし

【任淵注】

①交州記[45] 曰，椰子中有漿，飲之得酔。図経本草[46] 曰，椰子出嶺南州郡，実大如瓠，殼円而堅。里有膚，至白如猪肪，厚半寸許。味亦似胡桃。膚裏有漿，如乳，飲之冷而気醺。老杜詩[47]，山瓶乳酒下青雲。退之詩[48]，鵝肪截佩璜。

【通釈】

漿（液体）は乳酒（馬肉と葡萄で作った酒の名）となり，人を酔わせる。果肉は鵝肪（鵞鳥の白い脂肪）を切って客人の盤に並べたよう。タネは匏（ひさご）のように大きく，彫刻することができる。道装（道教徒や仏教との装束）をする時には，玉人（位の高い人）の冠にしてください。

①『交州記』に「椰子の中には漿（液体）があり，これを飲むと酔える」とある。『図経

45）『交州記』（『大観本草』巻十四「木部下品」，「椰子皮」条に見える）。
46）『図経本草』「椰子皮」（『大観本草』巻十四「木部下品」，「椰子皮」条）。
47）杜甫「謝厳中丞送青城山道士乳酒一瓿」，『九家集注杜詩』巻二三。
48）韓愈「城南聯句一百五十韻」，『五百家注昌黎文集』巻八。

本草』に「椰子は嶺南の州郡に生じる。実は大きく瓠ほどで，殻はまるく堅い。中に果肉があり，白くて豚の脂肪のようで，厚さは半寸ばかり。味は胡桃にも似ている。果肉の中には漿があり，乳のようで，これを飲むと涼しく，気が醺じる（酔う）」とある。老杜の詩に「山瓶の乳酒　青雲より下る」とある。退之の詩に「鵝肪　佩璜を截る」[49] とある。

子予，名は雩，と任淵の「目録」にある。椰子の詩の前に 1507「謝王子予送橄欖」があり，この詩の任淵注には『陳蔵器本草』が引用されているが，これも『大観本草』巻十三「木部中品」，「庵摩勒」条からの引用である。黄庭堅の『別集』に「跋王子予外祖劉仲更墨蹟」があり，劉仲更は劉義叟（1017 ～ 1060）のこと。天文学に通じていた。

1508「以椰子小冠送子予」は，徽宗建中靖国元年（1101），五十七歳の作。政治状況が変わって，黄庭堅の属する旧法党への弾圧が少し緩んだころ。この年の正月に江南を出発し，三月に峡州（今の湖北省宜昌市）に着いた。奉議郎・権知舒州が発令される。四月，江陵（今の湖北省江陵県）に着き，沙市（今の湖北省沙北市）に居住した。吏部員外郎が発令されたが，病気や弟の喪に服する等を理由に辞退し，太平州（今の安徽省当涂県）か無為軍（今の安徽省無為県）への着任を願い出て，荊州（江陵のこと）で待つ。七月，蘇軾が没した。

政治状況はすぐにまた旧法党に厳しいものとなり，崇寧元年（1102），五十八歳以降，荊州（今の湖北省江陵県）から鄂州（今の湖北省武昌県）へ，さらに宜州（今の広西壮族自治区宜山県）へと遠ざけられる。宜州へ向かう途中，桂州で作った詩に，2014「答許覚之恵桂花椰子茶盂二首」，2015「以椰子茶瓶寄徳孺二首」がある。

ここに本草文献は引用されていないが，椰子が南国のものであること，その南国にいま自分はいるのだという感慨が詠われている。

2014 答許覚之恵桂花椰子茶盂二首（其二）
　許覚之が桂花・椰子の茶盂を恵むに答うる二首（其二）

1 碩果不食寒林梢　　碩果食われず　寒林の梢
2 剖而器之如懸匏　　剖いて之を器とすれば懸匏の如し
3 故人相見各貧病　　故人相い見て　各々　貧病
4 且可烹茶当酒肴　　且く茶を烹て酒肴に当つべし

49）『大観本草』巻十四「木部下品」の「椰子皮」条と文字にやや異同がある。『大観本草』では「図経曰，椰子，出安南，今嶺南州郡皆有之。木似栳榔無枝条，高数丈。葉在木末如束蒲。実如挂物。実外有粗皮，如棕包。次有殻，円而且堅。里有膚至白如豬肪，濃半寸許，味亦似胡桃。膚裏有漿四・五合如乳，飲之冷而氛醺。人多取殻為器，甚佳。不拘時月採，其根皮用。南人取其肉，糖飴漬之，寄至北中作果，味甚佳也」とある。

【通釈】

大きな実がだれにも食べられることなく，さびしい林の枝に残っている。割って器にすると，掛けてあるひさご（世に用いられない比喩）のようである。昔なじみの君と私，どちらも貧乏だから，しばらくこの椰子の茶器で茶を煮て，酒と肴の代わりにしましょう。

2015 以椰子茶瓶寄徳孺二首（其二）

椰子の茶瓶を以て徳孺に寄す二首（其二）

1 炎丘椰木実	炎丘　椰木の実
2 入用随茗椀	入用されて茗椀に随う
3 譬如楛矢砮	譬えば楛矢の砮の如く
4 但貴従来遠	但だ従来の遠きを貴ぶ
5 往時万里物	往時　万里の物
6 今在籬落間	今は籬落の間に在り
7 知公一払拭	知る　公の一たび払拭して
8 想我瘴霧顔	我が瘴霧の顔を想わんことを

【通釈】

南方の熱い丘に育つ椰子の実が，取り入れられて茶器の仲間となる。楛矢のやじり（周の武王に粛慎国から届けられた貢ぎ物）のように，ただ遠方から来たことが貴ばれるのである。椰子は万里のかなたの物とかつて思っていたが，いま垣根のあいだに生えているのが見える。この椰子の茶器を貴方に送ったら，きっと塵ほこりを払って，瘴霧（病を発症させる南方の邪悪な気）の中にいる私の顔を想像してくださるだろう。

椰子の漿（液体）を飲むと，酔うという。黄庭堅は仏教（禅宗）の信仰篤く，四十歳の時に「発願文」を書いて酒を断ったので，酔うために椰子の実を採ることはなかったろうが，ひさごの代わりに茶器として使っていたという。椰子が生育する南方，かつて筆となった姿を面白がって詩に詠んだ猩猩が棲息する地域に，思いがけずいま自分はいる。

「但貴従来遠（但だ従来の遠きを貴ぶ）」という発想は，『山谷詩集注』巻一の冒頭の詩，0101「古詩二首上蘇子瞻」にも見える。元豊元年（1078），三十四歳の作。蘇軾を「江梅の佳実」に喩え，「得升桃李盤，以遠初見嘗（桃李の盤に升るを得て，遠きを以て初めて嘗めらる）」とある。0117「留王郎」に「我随簡書来，顧影将一身（我　簡書に随って来たり，影を顧みるも一身を将いるのみ）」，赴任命令を受けて随う者は影ばかり（たったひとり）の一身で遠いところまで来た，とあるが，任官にともなって各地を転々とする宋代の官僚文人として，

自分がいまどこにいて，家族や友人はどこにいるのか，頻繁に手紙や文物のやりとりをしながら，つねに確かめるように詩に詠っている。

五，本草文献のさまざまな情報

0307「顕聖寺庭枸杞」，0319「戯詠猩猩毛筆」，1508「以椰子小冠送子予」について詳しく見たところで，黄庭堅は本草文献から必ずしも薬効に注目して薬物を詩中に採り入れているわけではないことが，見えてきた。それでは何を，本草文献から採用しているのか。制作年の順に，残りの詩について確認する。

まず地方官時代の作品で，『山谷詩集注』巻一冒頭の 0101「古詩二首上蘇子瞻」其二に，菟糸子と茯苓が出てくる。樹齢の長い松には，その根には茯苓が，上には兎糸が生える，という昔からの言い慣わしがあり，松を蘇軾に，茯苓を門下の諸賢，菟糸子を自らになぞらえた，と任淵は解釈した上で，本草文献から茯苓が朽ちないこと，三十年たっても変質しないこと，長く服用すると精神を調えることを引用する。菟糸子も長く服用すると，目が明るくなり身は軽くなり寿命を延ばす。そこから「詩意」は，「謂依附賢者，足以自楽，至其不為当世所知，則亦自重難進，而未嘗汲汲也」，賢者に頼って自ら楽しむことができ，世間に知られないなら自重して出しゃばらず，まったく汲汲としないことだ，と任淵は解釈する。

0110「贛上食蓮有感」には丹砂と菰根が登場するが，丹砂は大きさが親指ほど，菰根は小児の臂ほどである，と本草文献を引用する。蓮の実は，花が枯れた後に花托の中で大きくなり，サイズが親指のアタマほどになる。実はでんぷん質が豊富で，乾燥させて食用にすることが多いが，生でも食べられる。生は緑色で，少し苦い。外皮を剥くと，中に芽があるが，これがまるで幼児の握った拳のような形をしている。黄庭堅は蓮の実をむいて食べながら，親指ほどの大きさという点から母親を連想し，さらに実が花托に並んでいるようすから兄弟に思いを馳せ，実の中にある芽から小さな手を握りしめている子らを連想した。丹砂も菰根も，大きさや形状を借りているだけである。

0113「演雅」には，礜石・鸛骨と螻蛄が出てくる。礜石は砒素を含む鉱物の一つで，鼠殺しなどに使われる。鸛という水鳥が水中で卵を暖める際に礜石を卵の周りに置くという話が本草文献に引用されており，黄庭堅がこれを「老鶴」とした理由は分からない，と任淵は疑問を呈している。螻蛄（ケラ）には鬼神の力があるので，夜に見つけると打ち殺すという。いずれも不思議な生態に関する博物誌的な知識を，本草文献から得ている。

京師汴京時代の作品では，0206「以小団竜及半挺贈無咎幷詩用前韻為戯」の鶏蘇と胡麻について，その別名が水蘇と巨勝であると注している。さらに，俗人が茶を煮るとこの二物を混ぜたがるという蘇軾の言葉を引用している。

0301「有恵江南帳中香者戯答六言二首」に登場する沈香と甲香は，香の材料である。次章で

詳しく取り上げる。

0403「和邢惇夫秋懐十首」には人参，0408「送顧子敦赴河東三首」には人参・紫参と葡萄が登場する。人参は「上品之上」の薬物で，「補五蔵，安精神，定魂魄」，五蔵を補い，精神を安らかにし，魂魄を安定させる。産地によって薬効は異なり，河東のものは紫団参と呼ばれ，薬物としては「功用極少」，効用がきわめて乏しい，という。しかし友人がそこに赴任するので，黄庭堅は詩に採った。河東には「馬乳葡萄」と呼ばれる葡萄が豊富で，本草文献に「子有似馬乳者」，実が馬乳に似ている，とある。やや細長い形の実をつける品種で，その形が馬の乳首に似ている。

0505「戯詠蠟梅二首」の麝香は，香料である。蠟梅の香りが強いことを，黄庭堅は麝香に喩えた。任淵は本草文献から，麝香がどのように獲得されるか（雄のジャコウジカの腹部に香嚢があるが，冬になって腹痛のため自ら脚で蹴り出したものが上品とされる），それがいかに高価か（真珠に匹敵する），引用している。蠟梅も当時珍しいもので，広東から都に運ばれて，黄庭堅が好んで詩に詠んだことから広く知られるようになった。

0508「賈天錫恵宝薫乞詩予以兵衛森画戟燕寝凝清香十字作詩報之」の石蜜・沈香・木瓜実は，香料である。次章で詳しく取り上げる。

0615「次韻秦覯過陳無己書院観鄙句之作」の薺は，甘くて羹になるという。

0721「次韻王定国揚州見寄」の鶏頭実は，別名を芡といい，「其形類鶏頭，故以名之」，鶏の頭に似ているから，と名前の由来を説明する。

0928「題伯時天育驃騎図二首」の蒺藜子は，「生馮翊平沢或道傍」，馮翊（郡名）の沢や道ばたに生える，という。題画詩なので，画中の沢かその傍の路に，描かれていたのだろう。

1105「戯答晁深道乞消梅二首」の梅実は，0101「古詩二首上蘇子瞻」にも蘇軾をなぞらえる物として登場する。ここでも夏に氷盤に盛るという記事が引用されるが，この詩では梅実は「消梅」に加工されており，人から贈られたものを「戯れに」詩に詠んだ。「以塩殺白梅，入薬用」，白梅の実を塩漬けにして薬用とする，つまり梅干しを言うようである。「詩意」は，「謂当梅実槁悴失性之時，丹杏方蒙献御之寵，与老成屏棄而新進見用何異哉」，梅の実が本来の酸味（古来，鼎の羹の味を調えるのに使われた）を失った頃，赤い杏の実が氷盤に盛られて愛でられる，老いたものは捨てられ新しいものがもてはやされるのだ，と任淵は解釈している。

晩年左遷時代の作品では，1401「走筆謝王朴居士拄杖」の木瓜実は，「俗人拄木瓜杖，云利筋脛」，俗人は木瓜（花梨）で杖を造る，という。薬用に使うのは実であるが，ここでは枝について詩に詠んだ。

1507「謝王子予送橄欖」の庵摩勒は別名を余甘子という。黄庭堅の詩句では「余甘」で登場する。食べると，初めは苦くのちに甘くなるので，「余甘」という。橄欖（オリーブ）も，初め苦く，のちに甘い。

1706「亀殼軒」の亀甲は，詩題にある亀殼が，別名を「神屋」ということの説明である。

1904「次韻徳孺恵貺秋字之句」の丹砂は，黄庭堅の詩句に「丹砂似箭頭」とあり，任淵は本草文献に「丹砂生石上，状若芙蓉頭，箭鏃」，形が芙蓉の頭や矢じりに似ている，とあるのを引用する。

2019「乞鍾乳於曽公袞」の石鍾乳は，金丹を練るための材料。刀圭はさじ。

六，香の材料の詩と黄庭堅による本草文献の言及

黄庭堅は居士として仏教（禅宗）を深く信仰していたことから，香に関する詩をいくつか残している。「帳中香」という香を贈られて，お礼として詠んだ詩がある。

0301 有恵江南帳中香者戯答六言二首①
　江南の帳中香を恵む者有り戯に六言二首を答う

1 百錬香螺沈水	香螺と沈水とを百錬して
2 宝薫近出江南	宝薫　近ろ(ちかご)江南より出づ
3 一穟黄雲繞几	一穟の黄雲　几を繞り
4 深禅想対同参②	深禅　同参に対せんことを想う
又	
1 螺甲割崑崙耳	螺甲は崑崙の耳を割き
2 香材屑鷓鴣斑	香材は鷓鴣斑を屑にす
3 欲雨鳴鳩日永	雨(あめふ)らんと欲して　鳴鳩　日　永し
4 下帷睡鴨春閑③	帷を下して　睡鴨　春　閑かなり

【任淵注】

①洪駒父香譜[50] 有江南李主帳中香法，以鵝梨汁蒸沈香用之。

②選詩[51]，豈意百錬剛，化作繞指柔。此借用。香螺謂螺甲，見下篇注[52]。唐本草注[53] 曰，沈水香出天竺単于二国，木似欅柳，重実，黒色沈水者是。伝灯録[54]，第二十二祖摩挲羅，至

50） 洪芻『香譜』巻下。

51） 『文選』巻二五，劉琨「重贈盧諶詩」。

52） 本篇第二首「螺甲割崑崙耳」句。

53） 『香譜』巻上「沈水香」引「唐本草注」。「唐本草」は，唐の蘇敬等奉勅撰『新修本草』のこと。

54） 『景徳伝燈録』巻二。

西印土焚香，而月氏国王忽睹異香成穂。按韻書[55]，穂亦作穟。法華経[56]曰，皆得深妙禅定。伝灯録[57]又曰，馬祖同参九人。

③唐本草[58]曰，蠡類生雲南者，大如掌，青黄色，取厭焼灰用之，今合香多用，謂能発香，復来香煙。按韻書[59]，蠡亦作螺。韓鄂四時纂要[60]載脩甲香方曰，取大甲香如崑崙耳者，酒煮蜜熬，入諸香等用。倦游録[61]云，高寳等州産生結香，山民見香木曲幹斜枝，以刀斫成坎，経年得雨水漬，復鋸取之，刮去白木，其香結為斑点，亦名鷓鴣斑。礼記月令[62]，鳴鳩払其羽。李商隠詩[63]，睡鴨香炉換夕薫。

【通釈】

江南の帳中香をくれた人がいたので，戯れに六言二首を返した

香螺（巻き貝の灰）と沈水（香木）を何度も練って，宝のような薫りの香（あの南唐の李後主が作らせたという帳中香）が，ちかごろ江南で作られた。ひとすじの穂のような黄雲（煙）が脇息のまわりに立ちのぼる。深妙禅（修行法の一つ）をして，（かつて馬祖道一に）同参した人々（のような友人，あなた）と向かいあいたい（李後主は美女と帳中で向かいあったのだけれど）。

又

崑崙（インド人）の耳を割いたような巻き貝の殻を焼いて灰にし，鷓鴣の羽のような斑点のある樹脂（沈水香）を細かくして，香の材料としている（貴重な良い香である）。雨が降りだしそうな気配に，晩春の長い昼下がり，鳩は羽をふるわせながら鳴き，とばりをおろした中では睡鴨の香炉に煙がたゆたい，のどかな春である。

①洪駒父[64]の『香譜』に，「江南李主帳中香法」[65]がある。鵝梨（梨の一種で，皮が薄く汁

55）『礼部韻略』巻四，去声五寘「穂」。

56）『妙法蓮華経』巻三。後秦・亀茲国三蔵法師鳩摩羅什奉詔訳。

57）『景徳伝燈録』巻六。

58）『香譜』巻上「甲香」引「唐本草注」。

59）『礼部韻略』巻二，下平七歌「嬴」に「蚌属。亦作蠡螺蝸」とある。

60）韓鄂『四時纂要』巻二。

61）宋・陳敬『香譜』巻一「沈水香」引。『倦游雑録』は北宋・張師正撰。

62）『礼記』「月令」。

63）李商隠「促漏」。

64）洪芻（字は駒父）は黄庭堅の甥。父の洪民師が黄庭堅の妹を娶り，四子（洪朋・洪芻・洪炎・洪羽）は「豫章四洪」と呼ばれた。早くに両親が亡くなり，祖母に養育された。祖母は黄庭堅の母の妹で，黄庭堅とその妹（洪芻の母）と洪民師はいとこの関係になる。祖父は洪文挙。

65）「江南李主」は南唐の李後主，李煜のこと。

が多い。濃厚な香りがある）の汁で沈香を蒸して使う。

②『文選』の詩に，「豈に意（おも）わんや　百錬の剛，化して指を繞る柔を作（なさ）んとは」とある。ここでは借用している。「香螺」は螺（巻き貝）の甲（殻）をいう。下篇の注に見える。唐の本草の注に，「沈水香は，天竺・単于の二国に産出する。木は欅や柳に似て，ずっしり重く，黒色で，水に沈むのが，これである」[66] とある。『伝灯録』に，「第二十二祖の摩挲羅（マヌラ）が西インドへ行き香を焚いた。そして月氏国の王はたちまち異香が穂のように立ち上るのを見た」とある。按ずるに，韻書に「穂」は「また穟とも書く」とある。『法華経』に，「みな深妙なる禅定[67] を得た」とある。『伝灯録』にはまた，「馬祖[68] に同参するもの九人」とある。

③唐の本草に，「蠡（ら。巻き貝の一種）の類は雲南に産出する。大きさは掌くらい，青黄色で，黒く焼いて灰を使う」とある。いま合香（あわせこう。香料を練り合わせて作った香）に多く使われる。詩句の意味は，よく香りを発して，煙がのぼるさま。韻書には，「蠡」は「螺とも書く」とある。韓鄂『四時纂要』に「脩甲香方」を載せて，「大甲香は，崑崙（インド人）の耳のようなものを採取し，酒で煮て蜜で煮詰めて，いろいろな香に入れて使う」とある。『倦游録』に，「高州や竇州（ともに現在の広東省）では結香[69] を産生する。山に暮らす人々は香木の幹や枝の曲がっている箇所を見つけると，刀で刻んで穴を作る。年月を経て雨水に漬かったものを，鋸で採取する。白木を削りとると，香が固まって斑点になっているので，鷓鴣斑とも呼ばれる」とある。『礼記』「月令」に，「（季春に）鳴鳩其の羽を払う」とある。李商隠の詩に，「睡鴨の香炉夕薫を換う」とある。

沈香（沈水香）は陶弘景の時代からあった薬物で，『大観本草』巻十二「木部上品」の「沈香」条に，

微温。療風水毒腫，去悪気。陶隠居云，此香合香家要用，不正入薬。惟療悪核毒腫，道方

66）「沈水香」（沈香）は，ジンチョウゲ科の香木。風雨や病気・害虫などで木が傷つくと，修復のため樹液が出て，それが固まって樹脂となり，長い年月をかけて胞子やバクテリアの働きにより成分が変質し，香りを放つようになる。樹脂により重くなり，水に沈む。とくに質のよい伽羅（きゃら）は，「沈香」のサンスクリット語（梵語）aguru（アグル）またはagaru（アガル）の油分が多く色の濃いものkālāguru（カーラーグル）が語源とされる。「天竺」はインドの旧名。「単于」は匈奴など北アジア遊牧国家の初期の君主の号。「天竺・単于」で産地の中央アジアから東南アジア一帯を指すか。

67）「禅」はサンスクリット語（梵語）dhyānaの音写「禅那」の略。「定」はその漢訳。思いを静め心を明らかにして，真正の理を悟るための修行法。精神を集中し，三昧に入り，寂静の心境に達すること。六波羅蜜の一。

68）馬祖道一（709～788），漢州什邡県の出身で俗姓は馬氏，諡は大寂禅師。

69）沈香の一種。ふつうは樹液の油成分だけが固まるが，現地の蜜香樹の繊維質がまじって鷓鴣の羽のような斑点になるという。

頗有用処。

微温。風水・毒腫を治し，悪気を去る。陶隠居云う，これは香合のために香家が使うもので，本当は薬には分類されない。ただし療悪核（悪性の腫瘤？）や毒腫（化膿性の腫瘤）を治すために，道家も処方してすこぶる効用がある。

とある。陶弘景の時代，仏教はすでに中国で広まっていたが，陶弘景自身は上述したように道教茅山派の開祖。

黄庭堅にとっては香の材料であり，0508「賈天錫恵宝薫乞詩予以兵衛森画戟燕寝凝清香十字作詩報之」の任淵注には，黄庭堅の跋が引用されている。

0508 賈天錫恵宝薫乞詩予以兵衛森画戟燕寝凝清香十字作詩報之（其三）

賈天錫　宝薫を恵んで詩を乞う　予「兵衛森画戟たり，燕寝清香を凝らす」十字を以て詩を作り之に報ず（其三）

1 石蜜化螺甲　　石蜜　螺甲を化し
2 槙檍煮水沈　　槙檍　水沈を煮る
3 博山孤煙起　　博山　孤煙起ち
4 対此作森森④　　此に対して森森を作す

【任淵注】

④山谷有此十詩跋[70] 云，賈天錫意和其法，斫沈水，如小博，投以槙檍液，漬之三日，乃煮去其液，温水沐之，螺甲磨去齟齬，以胡麻膏熬之，色正黄，則以蜜湯劇洗，又屑紫檀青木香，稍入婆律膏及麝，以棗肉合之，作摹如竜涎香状。按本草石蜜条[71]，陶隠居注云，即崖蜜也。唐本草[72] 云，蠡類生雲南者，大如掌，青黄色，取鱉焼灰用之，今合香多用，謂能発香，復来香煙，須酒蜜漬方可用。本草木瓜条[73]，陶隠居注曰，槙檍大而黄，可進酒。図経[74] 云，道家生圧汁，和甘松等作湿香。唐本草注[75] 曰，沈水香出天竺，単于二国。与青桂鶏骨餞香，同是一樹，葉似橘，経霜不凋，木似欅柳，重実黒色，沈水者是。漢故事[76] 曰，

70）黄庭堅跋。
71）『大観本草』巻二十「虫魚部上品」，「石蜜」条。
72）『香譜』巻上「甲香」引「唐本草」。
73）『大観本草』巻二十三「果部三品・中品」，「木瓜」条。
74）『図経本草』（『大観本草』巻二十三「果部三品・中品」，「木瓜」条に引く）。
75）『香譜』巻上「沈水香」引「唐本草注」。
76）呂大臨『考古図』巻十「博山香炉」引『漢故事』。

諸王出閤，則賜博山香炉。呂大臨考古図[77] 云，炉象海中博山，下盤貯湯，使潤気蒸香，以象海之四環。古詩[78] 云，博山炉中百和香，鬱金蘇合与都梁。対此作森森，謂博山百和之香，与此宝薫対焼，有森然畏敬之意。欧公詩[79]，孤煙起晴嵐。文選懐旧賦[80]，柏森森以攢植。

【通釈】

石蜜の湯で螺（巻き貝）の殻を加工し，槙槽（花梨）の汁で沈水香を煮て，この練り香を作る。博山香炉で焚くと，すっとひとすじ煙が立ち上る。これを見ていると，おごそかな心持ちになる。

④山谷にこの十詩の跋があり，「賈天錫の意和香の製法は，沈水香を斫って，小さな博山のようにし，槙槽（花梨）の液に入れて三日ほど漬けてから，煮てその汁を捨て，温水につける。螺甲はでこぼこしたところを磨いて取り除き，胡麻をすりこんでとろ火で煮て，色が真っ黄色になったら蜜湯でごしごし洗う。また屑紫檀と青木香，さらに婆律膏（龍能香のこと）と麝香を少し加え，棗の果肉をこれに合わせ，竜涎のような形の香に練り上げる」という。按ずるに『本草』「石蜜」条の陶隠居の注に「即ち崖蜜である」という。『唐本草』には，「蠡類は雲南に産出し，大きさは掌ほど，青黄色，黶（黒い斑点）をとって焼いて灰にして用いる。いま合香（練り香）に多く用いられる。よく香りを発し，煙がたちのぼる。酒や蜜に漬けたものを用いるのもよい」とある。『本草』「木瓜」条の陶隠居注に，「槙槽は大きく黄色く，酒とあわせる」とある。『図経』に「道家は生をつぶして汁とし，甘松などと混ぜて湿香を作る」とある。『唐本草』注に，「沈水香は天竺，単于の二国に産出する。青桂・鶏骨・棧香と，おなじ樹で，葉は橘に似ており，霜に打たれても凋れない。木は欅や柳に似て，実は重く黒色，水に沈む。「漢故事」に，「諸王　閤より出でて，則ち博山香炉を賜う」とある。呂大臨『考古図』に「炉は海中の博山をかたどり，下の盤に湯を貯え，蒸気で香りを立てる。海に四方が囲まれているようすを真似ている」とある。古詩に「博山炉中の百和香，鬱金・蘇合と都梁と」とある。「対此作森森」は，博山炉の百和の香りのことで，この宝薫を焚いていると，おごそかな気持ちになることを言っている。欧公の詩に「孤煙　晴嵐に起つ」とある。『文選』「懐旧賦」に「柏森森として以て攢植す」とある。

黄庭堅の跋文に香の製法について言及があり，任淵はこれを引いて，本草文献で確認をして

77）　呂大臨『考古図』巻十「博山香炉」。

78）　南北朝･吴均「行路難五首」其五，『玉台新詠』巻九。『香譜』巻上「都梁香」にも引用されている。

79）　欧陽脩「和徐生仮山」，『文忠集』巻五四。

80）　潘岳「懐旧賦」，『文選註』巻一六。

いる。1704「次蘇子瞻和李太白潯陽紫極宮感秋詩韻追懐太白子瞻」の任淵注にも黄庭堅の跋が引用されているが，内容から見て，1705「瓊芝軒」に付すべきものが過って紛れ込んだと思われる。1705「瓊芝軒」は徽宗の崇寧元年（1102），五十八歳，江州の紫極宮での作。

1705 瓊芝軒

瓊芝軒

1 卓僊在時養瓊芝　卓僊　在りし時　瓊芝を養う
2 深根固蔕活人命　根を深くし蔕を固くして人命を活す
3 憧憧来問此何草　憧憧として来って此れ何の草ぞと問わば
4 但告渠是唐婆鏡　但だ告げよ　渠が是れ唐婆鏡

【通釈】

仙人のような道士卓玘が存命のころ，玉芝を植えて，根は深く蔕は固くなるまで育て，人の命を長くした（それがここ瓊芝軒の由来である）。次々と人がやってきて「これは何の草ですか」と尋ねたら，「あれは唐婆鏡ですよ」と言っておけばよろしいでしょう。

任淵が引いている黄庭堅の跋は，かなり詳細である。

子瞻詩所記胡道士，玉芝一名瓊田草者，俗号其葉為唐婆鏡，葉底開花，故号羞天花。以予考之，其実本草之鬼臼也。歳生一臼，如黄精而堅瘦，満十二歳可為薬。就土中生根，取一臼，勿令大本知也。煮麺如餫餛皮，裹一臼呑之，数日不飢，啗三臼可辟穀也。黄龍山老僧多採而断食，令人体臞而神王。今方家所用鬼臼，乃鬼灯檠耳，如蜀人用鬼箭，但用一草根，不知何物也。鎮陽趙州間，道傍叢生三羽者，真鬼箭。俗医用薬如此，而責古方不治病，可勝歎哉。因論玉芝，故并記之以遺胡道士。道士胡君洞微，卓君玘之弟子。卓君之時，欲崇飾宮観，而俗緑薄，規模甚遠而不成就。及胡君而官殿崇成，便斎曲房，松竹薈蔚，観其軒窓開塞，宜冬而愜夏，智慮通物者也。又好文多芸，能治賓客具，至者忘帰。此東坡先生所以毎至而留連者歟。

子瞻（蘇軾）の詩に（紫極宮の）胡道士のことが記されていて，「玉芝は別名瓊田草，俗号にその葉を唐婆鏡といい，葉の底で花が咲くので，羞天花と呼ばれる」とある。私が考察するに，その実は本草の鬼臼である。毎年ひとつ臼ができ，黄精の根のようで堅く瘦せていて，十二年ものは薬になる。土の中で根を生じ，一臼を得ても，その大本を知られてはならない。小麦粉を煮るときに餫餛の皮のように，一臼を包んでこれを呑むと，数日飢えることがない。三臼を食らえば穀類を避けることができる。黄龍山の老僧はこれを多く採って断食し，人体が瘦せて神王のようになる。今の方家が用いる鬼臼は，

鬼灯檠であって，蜀人が用いる鬼箭のように，ある草の根ではあるが，どんなものか分からない。鎮陽趙州のほうでは，道傍に三羽のものが群生して，これが本物の鬼箭である。俗医は薬としてこのように（蜀人が鬼箭を用いるように鬼灯檠を）用いて，古方（むかしの処方）では病を治せないと責めるが，嘆かわしいことだ。（以下，略）

明・李時珍『本草綱目』巻十七下「鬼臼」には，黄庭堅の跋から「…満十二歳可為薬」までが引用されている。ここまでは，鬼臼の薬物としての記述である。

鬼臼を食べると飢えないので黄龍山の老僧が修行のために利用するというのは，黄庭堅が自分で見聞したことである。黄庭堅の出身地の江西は臨済宗の勢力範囲にあり，黄庭堅が生まれた洪州分寧は黄龍派発祥の地であり，黄庭堅は慧南（1002 ～ 1069）が開いた黄龍派の禅宗を，その弟子の晦堂祖心（1025 ～ 1100）から学び，晦堂の弟子の死心悟新（1044 ～ 1115）や霊源惟清（？～ 1117）とも交流があった。

「深根固蔕（根を深くし蔕を固くす）」という表現は 0101「古詩二首上蘇子瞻」其二にも使われていて，

医和不並世　　医和（いか）　世を並べざるも
深根且固蔕　　根を深くし且つ蔕を固くす

名医医和（いか）と同じ時代には生まれあわせなかったが，深く根をはり，蔕もしっかり結んでいる，という。仏が衆生を救うさまを良医に例えることがあり（法華七喩の一，良医病子），あるいは薬草から良医への連想に関係があるかも知れない。

おわりに

以上，任淵注に引用されている本草文献から出発して，黄庭堅の詩をいくつか読んでみた。

『山谷詩集注』全二十巻は，巻一冒頭の 0101「古詩二首上蘇子瞻」に薬草（菟糸子・茯苓・遠志）が登場し，巻二十最後の 2019「乞鍾乳於曽公袞」[81] にも薬物（石鍾乳）とさじ（刀圭）が登場する。若いころ薬屋にでもなろうかと考えたこともあるという黄庭堅の本草に関する興味は，生涯を通じて変わらなかった。

黄庭堅の詩に登場する薬物は，必ずしも薬効そのものが詩に詠われているのではなく，博物誌的な知識や言葉の面白さから発想を得ているものも多い。同時に，薬草に自らを投影したり，仏を供養するための香の材料や僧侶が修行に用いる薬草について，かなり細かい知識や見解も見られた。

学問の修練を重んじ，「字字有出処（どの言葉にも由来がある）」と称される黄庭堅の詩であ

81）　この詩を任淵は，黄庭堅の絶筆かとする。

るが，本草文献についても，文献に書かれている知識をそのまま詩に採用するのではなく，詠みたいテーマにあわせて選択している。その詩は「どこかで見たことのある言葉のよせ集め」ではなく，「これが山谷詩だ」と読者に納得させるものである。そうでなければ，創作者とは言えないだろう。

人物に関心が深いこと。歴史的な事柄に連想がいくこと。都で活躍していた時期も地方に左遷されていた時期も，蘇軾らほかの文人との盛んな交流があり，茶や香を含めて文物のやりとりが多く，その際に詩を添え，応酬すること。しばしば言葉遊びの要素があり，諧謔に満ちた「戯れに」作った詩も多いこと。背景に仏教（禅宗）に対する深い理解と信仰があること。これらが山谷詩らしさであり，本草文献から出発しても，やはり黄庭堅はこういう詩を作るのか，というところに帰着するのである。